木の目草の芽

2016年9月28日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

第１２４号
全国集会報告号②

〈目 次〉

P.1 基調講演「SOS 三嶺の自然」
石川 慎吾

P.5 フィールドスタディ報告
工石沢コース 尾野 益大
工石山コース 野島 信隆
植物園見学 井藤 恵美子

P.9 支部報告（当日追加分）

P.10 追悼：酒井展弘氏を悼む
山村 孝夫
川口 章子

P.11 お知らせ
第 20 回森の勉強会のご案内

全国集会基調講演「ＳＯＳ 三嶺の自然」

日本山岳会四国支部自然保護委員長、高知大学教授

石川 慎吾

皆さま、全国遠いところからお集まり頂きありがとうございます。またこのような発表の機会を与えてくださりありがとうございます。本日は三嶺の自然の現状をお話します。高知県では三嶺（さんれい）、徳島県では三嶺（みうね）と呼んでいますが、今日は高知で開催しておりますので、三嶺（さんれい）と呼ばせてもらいます。

今日は「三嶺の森をまもるみんなの会」の取組みを中心にお話したいと思います。この会は住民主導で、多くの主体―各種山岳会、四国森林管理局(中部森林管理署)、高知県(鳥獣対策課、環境共生課など)、環境省中国四国地方環境事務所、香美市など物部川流域の自治体―と連携しています。それが好循環を生んでいる全国でも稀有の取組みではないかと思います。三嶺山域の生態系や生物多様性の保全を目的として、防鹿柵の設置、樹木ガードの取り付け（ラス巻き）、土壌侵食防止用の植生シート敷設に加え、生態系や植生の調査・モニタリング、本や資料集の作成、シンポジウム開催、写真パネル展などの普及啓発活動を行っています。中でも一番大切なのが、鹿の頭数管理です。剣山系には一時はシカが

二〇～八〇頭／㎢もの密度で生息していると推定されていました。現在の密度は管理捕獲によって低下していますが，適正密度が三～五頭／㎢と言われていますので、非常に高密度だったといえます。高密度のシカの食害によって剣山系の植生が危機的なまでに衰退してしまったので、シカ密度はゼロに近づけなければならないと考えています。

三嶺の山頂から南へ伸びる稜線上のカヤハゲから韮生越では、二〇〇六年まではミヤマクマザサが青々を覆っておりました。ところが、二〇〇七年には一面の緑のササが突如として茶色に変色してしまいました。次の年には全部葉を落として真っ白になり、劇的に変化しました。実はこの劇的な変化が現れる前からシカの食害が進んでいたのです。図1は三嶺の森をまもるみんなの会の代表である依光良三氏によってまとめられたものです（依光二〇一五）。

これによると二〇〇〇年前後に被害の兆候が出現してから急激に植生への被害レベルが上昇し、二〇一〇年ごろにピークに達しました。その後、管理捕獲によってこの地域のシカの個体数が徐々に減少し、それに伴って植生への被害状況も緩和されてきています。しかし、一度大きな損傷を受けた林床植生の回復は遅く、土砂流失の進行が止まらない状況が続いています。

剣山系のササ草原の現状について、広域的に調べたデータがあるので、それを紹介します。高知大学学生の堀澤凌甫君が二〇一一年九月から一一月にかけて、綱附森から剣山にかけての約三〇㎞の主稜線を踏査し、ササ草原のシカによる被害状況の評価を行ってくれました。ササ草原の被害状況を、葉の生残率に着目して以下の六段階（ランク）に区分しました。① 八〇%～一〇〇%生残（食害軽微）、② 五〇～八〇%生残、③ 三〇～五〇%生残、④ 一〇～五〇%生残、⑤ 一〇%未満が生残（全面枯死寸前）⑥生残率〇%（全面枯死）。

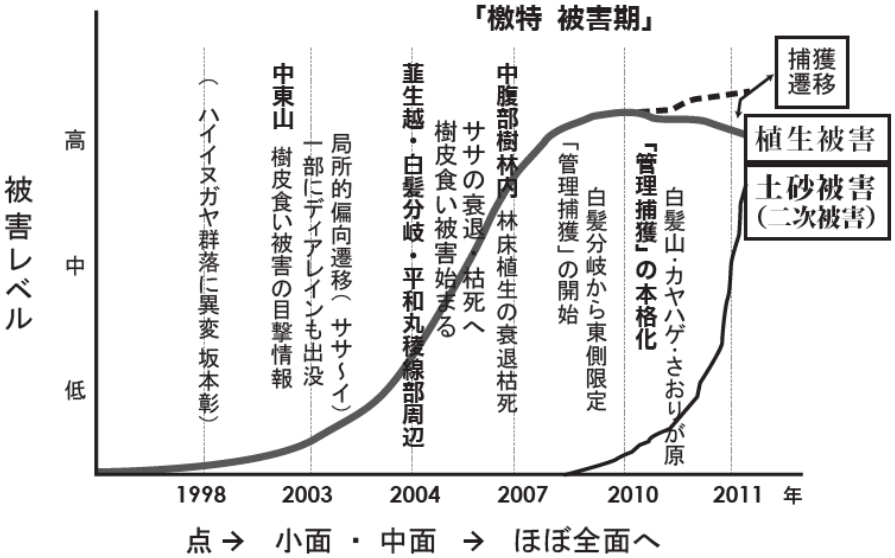


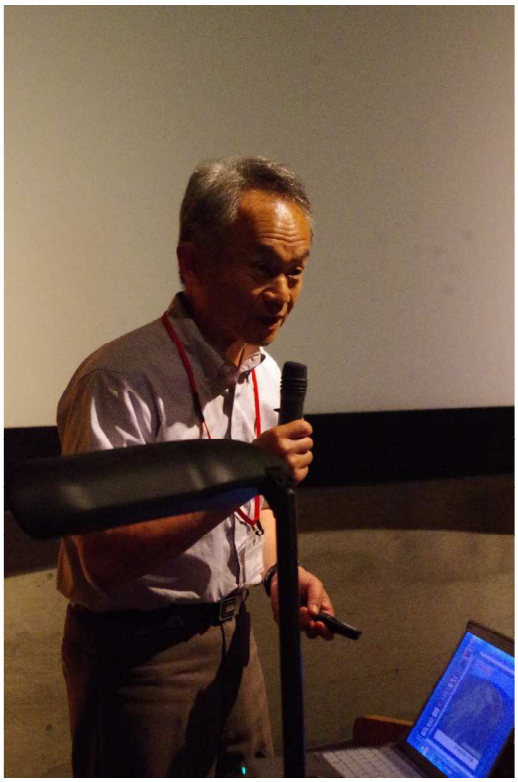
図1 三嶺山域におけるシカによる被害の変遷・推測図（依光 2015）

剣山系全体でのササ草原の被害面積を、強度別に集計してみると、ランク①から②の被害の軽微なササ草原が約六割を占めています。一方、ランク⑥の全面枯死したササ草原の割合は約七%で、全面枯死寸前のランクを加えると約一割のササ草原が消失したことになります。ランク③から④の全面枯死予備軍のササ草原も一三%に達しており、シカによるササ原への被害は確実に拡大していることが見て取れます。踏査の結果、稜線上に広く分布するササ草原が同じような状況で衰退しているのではなく、被害の強度には場所によって大きな差がありました。このことは、今までにも言われてきたように、四国のように雪の少ないところに生息しているシカの行動範囲は比較的狭く、利用しやすい場所から徹底的に食べつくしてから別の場所に移動していく

傾向がある、ということを示しています。

シカが剣山系のササをどれくらい食べているのかざっくりと見積もってみると約四十％です。二〇一二年の段階でこれだけ喰われているのです。最近は復活している所もありますが大きな傾向は変わりません。

また、四国森林管理局が二〇一二年に撮影した空中写真を使って、樹木がどれだけ枯れているのか調べました。特にウラジロモミなどの針葉樹は樹皮が柔らかく、真っ先に剥皮の被害を受けますので、立ち枯れしている個体がたくさんあります。環境省の植生図で針葉樹に区分されているところで、空中写真で判別できる地点を選んで生死を調べました。孤立したパッチは枯死木の割合が高いです。実際には十数パーセントしか全木調査をしていませんが、外挿して枯死木の本数を見積もりました。剣山系の範囲では生立木が約十万本、二〇一二年の段階で枯死木が約四万本です。それ以後、私の印象では被害は急激に増加はしていませんが、徐々に増えているという状況が続いています。



もう一つの懸念材料は、山腹の崩壊、表土の流出です。この写真は二〇〇四年に発生した大規模崩壊です。崩壊した土砂は流水で川に流れこみます。結晶片岩が風化し粒子が細かいため、川の濁りを引き起こしている状況が続いています。物部川は地元の人達の努力の結果、二百万匹もの天然アユが遡上するようになっていたのですが、雨天が続くと物部川の濁水が長期化するようになり、アユなどの水産資源に深刻な影響が出ています。

二つの年代の空中写真を使って同じ所を特定できる崩壊地を判読し、変化なし、拡大したもの、新しく出来たもの、回復したものに分けてみました。すると、新しくできた崩壊地が多かったのです。山は崩れるものですから、本来は崩れる面積と回復する面積が釣り合っているものですが、剣山系では崩壊地が増えているのです。鹿が増えて植生が衰退し、崩壊の頻度が高くなったことと、崩壊地への植物の定着がシカによって阻害されているのが原因ではないかと思います。

崩れ始めの状況がどうなのか、お見せします。ササが衰退し、植生が破断してブロック状になって滑り落ちるのが崩壊の始まりです。遷急線（急に傾斜がきつくなる地点を結んだ線。斜面崩壊や侵食が発生しやすい場所とされる。）は水が集まってくる場所なので、イグサが優占しています。表層の地下水が集まって地下にパイプのような孔が開き、ササの根茎が無くなって結合力が弱くなった植生を破断して、滑り落ちていることが見てとれます。全体に表層の水の流れも崩壊に大きな影響を与えていることが明らかとなりました。

ササの根の強度試験をしてみると、生きている場合は非常に強いのですが、腐朽していると簡単に折れてしまいます。崩壊斜面上部は土壌を捕縛する力のない腐朽根ばかりです。

ササが枯れた跡には繁殖力が極めて強いヤマヌカボや蘚苔類が侵入し、植生回復に大きな役割を果たしているのですが、これらの群落は傾斜の急な斜面では定着が悪く、特にカヤハゲ南斜面中央部の急傾斜地ではほとんど定着しません。ヤマヌカボはヒゲ根で縦の結合力はあるのですが、横の結合力は弱いのです。春や秋の凍結融解によって土壌がブロック状に割れて流されてしまうのではないかという仮説を立てて、インターバルカメラを設置してモニタリングしています。

また土壌侵食を防止するために菰を張りましたが、菰そのものが流されてしまったのに加え、菰によって土壌が捕捉された場所でも、菰の横に新たなガリー（斜面が雨によって侵食されて形成された深い溝）が発達し、表層土壌の流失を食い止めることができませんでした。二〇一四年にようやく四国森林管理局で予算化されて植生シートを購入することができ、二〇一四年五月と二〇一五年十月に表土流失が激しかった斜面のほとんどを覆うように植生シートを敷設することができました。今後、敷設したシートに定着した植生を調査し、シートの効果を検証していく予定です。

また、この山域には防鹿柵を六十くらい設置しています。防鹿柵の効果を調査した結果をお見せします。ミヤマクマザサが二〇〇七年に一面枯れましたが、二〇〇八年に設置した防鹿柵の中ではミヤマクマザサが回復しました。ですが、一年以上たった二〇〇九年に設置した防鹿柵の中では回復しませんでした。ミヤマクマザサは地下茎にエネルギーを貯えているので、しばらくは新しい稈（ササの子）を出すことができますが、一年以上シカに食べられ続けると、地下茎のエネルギーを全部使い果たしてしまうのでしょう。全面枯死したササの群落を保全するためには、間髪いれずに防鹿柵を設置しなくてはいけません。

カヤハゲと韮生越に設置した四つの防鹿柵（一辺が二十五メートルの正方形）の内部の植物の出現種数は一一五種でした。柵外では五十種しか確認できませんでしたので、ここでは六五種を保全できたと言えます。

防鹿柵は植物の多様性の保全と復元に非常に効果がありますが、これは暫定的な対策にすぎません。シカが適正な頭数に減るまでは設置してある防鹿柵を維持して、植生を守り続けなければなりません。去年は大雪が降り、防鹿柵のポールが折れてしまい、修復が非常に大変でした。山岳会の卓越した体力をお持ちの皆様、是非、剣山系における生態系の保全活動にご協力いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（記録：下野綾子）

※石川先生の基調講演は、四国支部の支部報告を兼ねています。

フィールドスタディ報告（7月17日）

▼工石沢　沢登りコース

四国支部　尾野　益大

「谷は山の一部である…よい山にはよい谷が必ずある。その山のよさを知るのには、谷からすることが最もよいと思うようになった」

日本山岳会名誉会員、冠松次郎が半世紀以上前にそう書いた一文がある。工石沢のことではないが、この山の魅力にも当てはまると思う。自然保護全国集会のフィールドスタディの趣旨に合うと信じ、初めて沢登りを提案して取り入れてもらうことになった。

山田和人副会長、中山茂樹理事、直江俊弐理事、野沢誠司評議員、近藤雅幸元自然保護委員長をはじめ、全国及び四国支部会員有志らが参加。安全対策として地元の山々に精通した四国の名門、土佐アルパインクラブの会員にも協力してもらった。

前夜降っていた雨は上がり、雲行きの心配はあったが尻上がりによくなると判断して、川口章子自然保護委員長を座長とする朝のミーティングで実施を決定。バスで送ってもらい標高４７０㍍の車道から入渓した。

常緑の木々が多いため暗い感じだが、奥山のムードが漂うともいえる。緑のコケが石を覆い、これも雰囲気を盛り上げるのに一役買っている。

ゴーロがしばらく続く。水の中、転石…皆、思い思いに辿る。「四国の会員は水に入るのが好きですね」と近藤さんが気付いた通り、先頭の長瀬美代子さんは流れの真ん中をバシャ、バシャと、こともなげに進む。腰まで潜ってもおかまいなし。慣れたものだ。

現れたのは稲光状の４段になった滝。右岸を巻いた。見た目より手掛かり足掛かりがある急斜面を這い上がり、上部の３㍍の岩肌は意外と滑りやすい。一人ずつロープで確保しながら慎重に通過。途中まで左岸から登ってきて合流するメンバーもいた。

河原を過ぎ、小滝が連続するようになり、慎重にバランスを取って登る小岩も出てきた。高度がぐんぐん上がり始める。深い森と豊かな水量に恵まれてムード満点。フィールドスタディに本来あるべきと思われる一木一草の観察こそしないものの、山のもう一つの個性を大きな視野で学ぶには沢登りは正にぴったりといえるだろう。

時折、陽光が差すが、完全に晴れることはない。雲は厚いようだ。どんどん進むため決して寒さは感じない。約５８０㍍、約７００㍍地点で２回、大きな二又が現れ、どちらも右の本流を選ぶ。

上の二又を過ぎたころ、2段8㍍の滝が行く手を阻んだ。大きく迂回することもできそうだが、これがハイライトの滝。やや傾斜があり、少々シャワーを浴びることを覚悟しなければならないが、ホールドはあるため、個々の自由な判断で挑戦。必要な人にはロープを結んだ。

水の量は相変わらず多く、相変わらずバシャ、バシャ。階段状の小滝が続く。沢の幅も狭まってきた。

青少年の家から続く車道に出た。「ここで中断」と決める。計画通りさらに1時間沢を登って下山するとなると、午後2時までに帰れなくなるからだ。弁当を食べ、七つ道具を外して帰路に就いた。サンショウウオが棲むという「賽の河原」に行けなかったが、またの機会を期待することにした。不満の声はなかった。

工石山は標高の割に自然が豊かな山として有名だ。頂の眺望も非の打ち所がない。しかし神髄は頂まで行かなくても理解できた気がした。冠松次郎はこんなことも書いている。

「立派な頂を持っている山ならば、必ずその懐にも立派な景観を秘めている。懐に秘在する森林、渓谷、池沼、そういうものの総合した美しさが、私たちの心をしてその山に親しませる」。

（写真提供：長瀬美代子さん）

▼工石山登山 コース

広島支部　野島 信隆

コースタイム：

9時10分　工石山青年の家出発、9時30分　杖塚着、10時10分　桧屏風岩、10時30分　サイの河原、11時15分～11時45分　工石山南の頂上(昼食)、12時10分　北の頂上(展望盤)、12時20分　トド岩、12時30分　桧の風倒根、12時40分　八起白鷺岩、12時45分　根曲り杉、12時55分　杖塚、13時15分　工石山青年の家へ帰着。

概要：

心配された雨は上がり、雨具を着用する事なく工石山の自然保護状況を観察し、交流を図りながら工石山を楽しむ事ができた。

7月17日(日)朝食後、体育館に集合して本日の計画について、班編成を見直した。早朝からの雨の影響で牧野植物園に変更する人が多く、工石山登山は右回りと左回りの2班で44名の参加予定が約半分の25名となった為、右回りのみの1班で登る事になった。

私は高知県出身で高校卒業迄は高知で育

ったが、山を始めたのは会社に入社後なので、工石山に登るのは初めてであり、工石山登山を選んだ。

工石山青少年の家の前で、参加人数を確認・ストレッチ後、四国支部の清家さんをリーダーに出発する。雨は上がり私は四国支部の小林前事務局長や広島支部にも在籍されている宮田先生と話しながら登る。工石山は自然休養林第一号に指定された山との事で、登山道はよく整備された遊歩道で歩きやすい。杖塚で休憩し、冷たい清水で喉を潤す。

これからは南回りコースを、桧屏風岩とサイの河原で休憩しながらシャクナゲ道を通って工石山の南山頂に到着した。晴れていたら、石鎚山や剣山・太平洋が望めるとの事だが、天候不良で周囲はガスに囲まれ、展望台に登っても全く視界が利かず残念だった。

昼食後全員で記念撮影した後、北回りコースを下山する。北頂上で休憩し展望盤で晴れていたら見える山を確認する。私達はこれ以降、高知大学の石川先生の説明を聞きながら下山した。トド岩で展望を楽しみ、ひのき風倒根では看板の間違いを教わり、途中で牧野富太郎博士が発見されたヒメコウモリソウを石川先生に教えて頂いた。又、登山道そばに生えていたタマゴタケを取って頂き、「毒キノコと思われている方が多いが、美味しい。」と説明され、口頭では信用されないと先生が持参されていたタブレットで間違いがない事を説明して頂いた。

石川先生の持つタマゴダケ

八起白鷺岩・根曲り杉を過ぎると、全国の県の木を当っこし、確認しながら杖塚に戻り、工石山青年の家へ帰着し、ストレッチをして、留守番の川口委員長に報告した後、解散した。

四国支部の皆さんの引率で、安全に楽しいフィールドスタディが出来て良かった。今回は季節はずれで花が少なかったので、アケボノツツジやシャクナゲの見頃に再度訪れたいと思う。

私は自然保護全国集会へは3年連続の参加だったが、今回は故郷の高知県での開催であり、広島からは近いので、広島支部から出来るだけ多くの参加を呼びかけ、兼森支部長・前垣自然保護委員長以下6名が参加して、本部や他支部の方と交流出来た。今後ともよろしくお願い致します。

▼牧野植物園見学コース

東海支部　井藤　恵美子

２０１６年度の自然保護委員会全国大会が高知県の牧野植物園、工石山等で開催され、17日のフィールドスタディは、牧野植物園での植物の観察会に参加した。

日本の植物分類学の父とされている牧野富太郎は、１８６２年、高知県高岡郡に生まれ、独学で植物の知識を身につけ、１８８４年に東京帝国大学（今の東京大学）の

理学部植物学教室に出入りするようになった。以後、精力的に研究発表を重ね、１８８９年に「日本植物誌図鑑」、１９００年には「大日本植物誌」などの刊行に携わり、１８８９年には、日本で始めての新種のヤマトグサに学名をつけている。

「県立　牧野植物園」は、１９５８年、牧野富太郎の業績を記念する建物として、五台山に開園した。１９９９年には、内藤廣氏設計による、「牧野富太郎記念館」がリニュアールオープンした。木がふんだんに使われており、木の温もりに浸りながら館内の展示を見ることができる。記念館の階段下には、雨水をためる貯水槽が設けられ、植物の水やりに使われている。

また、２００８年には50周年記念庭園、２０１０年は温室もリニュアールオープンしている。

面積は17・8ヘクタール、場所は高知市の五台山、開園時間9時から17時、休園日は　12月27日から元旦である。

牧野植物園観察組は、正門からの入場でボランテア案内人について園内を回った。まず正門の通路の右手と左手の植物についての観察である。

通路の右手は土佐の標高１０００メートル以上の植物が植栽され左手は１０００メートル以下の植物が植栽されている。

ハマエンドウ、コウボウムギなどが印象に残った。またウマノスズクサの花が満開であり、あ、やはりサキソホンに似ている、と思った。

続いて連絡道に入った。連絡道ではその壁に沿って、スエコザサが植えられていた。しばらく歩くと、展望台があり植物園の低いところがよく見渡せた。確認はしていないが低いところには川が流れているような風景である。その左手に高木が連なり、木々の上に数十羽のアオサギが確認できた。木々はアオサギのコロニーとなっている。あれだけのアオサギの胃袋を満たすには、沢山の魚等が必要であると思われたが、ため池も沢山あるのかもと考え一人で納得した。

バラの花を楽しんでから、温室に入った。さまざまのランが競うように咲いていた。花の大きさとその悪臭は世界一と言われている、ショクダイオオコンニャクの匂いはあまり気にならなった。開花して5日目とのことである。

牧野富太郎植物園では、雨水の利用や、沢山のウマノスズクサの可憐な花を確認できた。また、東海支部以外の知人たちとの久しぶりの語らいも楽しかった。永年の夢であった牧野植物園をしっかりと楽しむ事ができた。

牧野富太郎植物園を会場としていただきご苦労をおかけした皆様にお礼を申します。

支部報告：追加分

（当日配布いただいた報告を転載します）

■京都滋賀支部　　松下　征文

ダンダ山(591m)とダンダ坊、そして湖北のトチの木巨木林

比良川は出会橋で右が神璽谷、左は正面谷となっている。この間の尾根筋がダンダ山へと続いている。この尾根の下部に広大な寺院遺構が広がっていて、ここがダンダ坊と呼ばれている。

昭和40年ごろ谷の分岐するところに出会小屋という営業小屋があり（現在は無い）、この小屋の増築時に獣面脚が見つかり調査の結果、遺跡と認定されましたが、現在まで詳細な調査は行われていません。謎に満ちた遺跡といわれています。

ダンダ坊の詳細は省きますが、比良山系ダンダ坊は比叡山延暦寺の勢力下で比良三千坊と呼ばれるものの一つだったようです。県により散策道等が整備されましたがそれっきりで、荒れるに任され人も入れなくなりました。

京滋支部有志や山仲間で4年前より整備を始めました。上部は保安林となっていますが、荒れたままです。

遺構の散策路整備、ダンダ山への登山道整備と森つくりを京滋支部有志が中心となって行っています。いずれは京滋支部として整備していく予定です。

四季にわたり子供と家族連れで楽しめるダンダ坊、ダンダ山、針広混交林の明るい場所です。

トチの木巨木林

琵琶湖の湖北や湖西北部には、樹齢３００年～５００年のトチの木巨木林があります。その保存活動に協力しています。豪雪地帯で豪雪から山村や谷を守り琵琶湖の水質保全に大きな役割を果たしています。

■北海道支部　　長谷川　雄助

―北海道のエゾシカ対策の変遷―

エゾシカの保護から総数管理政策に転換

北海道が開拓される以前は、エゾシカはアイヌ人の生活のための食用と皮を被服とするため狩猟していた。また、エゾオオカミの主食で、生息数の均衡が保たれていた。明治政府時代、欧米食文化が移入されシカ肉の需要が高まり、北海道東部地域に多数生息していたエゾシカを捕獲し、シカ肉缶詰が大量に輸出された。シカの乱獲時代を迎え極端に減少したため、禁猟政策を取って保護活動を行った。

その後、オスジカに限定して捕獲を許可していたが、平成22年ころから急速に増え始め、農業被害も65億円に達したことから、北海道は緊急対策期間を設けてメスを優先駆除する方針に転換し、年間13万頭～14万頭を駆除することとなった。

平成22年、推定63万頭であったのが、平成26年には48万頭に減少し、今後も年間13万頭から14万頭を駆除していき、緩やかな減少傾向を維持していく政策に転換した。

■宮城支部

からは、２０１５年９月から２０１６年４月までの、阿武隈山地での放射線量調査結果を記載した「原発事故による阿武隈山地の放射線量（抄録）」が配布されました。

〈追悼〉

酒井展弘さんを悼む

京都・滋賀支部　山村 孝夫

２０１６年４月に亡くなられました酒井さんとは、京都・滋賀支部の自然保護委員会で知り、時々山へも一緒に行きました。決して派手な行動をしない方で、頑丈な足腰の持ち主でもありました。

上高地で全国自然保護集会が行われ、２人で参加した時のことです。朝10時からのミーティングに間に合うようにと、京都を前日の夜に出発し藪原のバス停で仮眠をとっていた時、彼はベンチの上で寝ていて、朝までに3回程落下したにもかかわらず、良く眠れたと言っていました。

又、上高地ではミーティングや夕食も終わり眠りについたのですが、何処の誰か分からないお爺さんがなぜか部屋に紛れ込んでいて、寝ぼけていたのか人の手などを握ったりしていました。みんな驚いていましたが、酒井さんは朝になって「そんなこともあったな」と、何でもないふうに言っていました。(僕自身も手を触れられたのでしっかり憶えています)。その時、いやーこの人はタフな人やなぁーと思いました。又、反対に細やかな神経の持主でもありました。

突然の訃報を知らされ、人の命ってそんなものかもなぁーと、自分自身にも言い聞かせております。

自然保護委員長　川口 章子

4月10日に亡くなられた酒井展弘さんは、２００７年に京都・滋賀支部の自然保護委員長に就任され亡くなられる日まで委員長としてご活躍くださいました。

自然保護全国集会には毎年必ず参加してくださり、今年は10回目の参加の申し出を「高知の牧野植物園にはいくからなー」と越後支部での支部懇親会のロビーで約束の握手を満面の笑みをたたえられて、交わしあいました。その優しいほほえみが私の脳裏に残っている4時間後に旅立たれました。

懇親会ではお酒の瓶を抱え、交流のあった方々と酌み交わされ楽しそうに話されていて、「帰ったらイタリアに行くんだ」とも言っておられました。元気に前向きに行動的な方にも死は突然やってくる惨さを改めて思いました。

御霊前には今にも話しかけてくださりそうな肖像画、愛用のリュックサック、登山靴などが飾られていました。

酒井さんのガイドで山行をされたカルチャーセンターの会員の方が「最後になった山行の時もこのリュックだったわ」と思わずつぶやかれたのが胸にじんときました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

〈お知らせ〉

第20回森の勉強会　与喜山暖帯樹林

森の勉強会は、公益社団法人日本山岳会東海、京都・滋賀、関西各支部自然保護委員会の共催で、講師をお迎えして森林の生態を講義で学び、現地の森林を観察し学習して勉強してきました。今回の20回で最終回となります。皆様のご参加をお待ちしています。

共催　公益社団法人日本山岳会（東海、京都・滋賀、関西　各支部自然保護委員会）

期日　平成28年11月5日（土）～6日（日）

会場　5日　長谷寺温泉　井谷屋（奈良県桜井市初瀬828　近畿日本鉄道大阪・山田線　長谷寺駅下車　徒歩15分弱　電話：0744-47-7012）

6日　天然記念物　与喜山暖帯林

受付　5日　12時30分～

（講座）13時～17時

宿泊　長谷寺温泉　湯元　井谷屋

TEL：0744-47-7012

行程　（都合により、時間・コースを変更することがあります。）

〈5日〉

12時30分～12時45分　受付

12時45分～13時　オリエンテーション　スケジュール案内と講師紹介

13時～15時

座学「照葉樹林とシカをめぐる生態」

大阪産業大学大学院　人間環境学研究科　教授　学術博士　前迫ゆり

15時15分～16時45分

野外学習　愛宕山と與喜天満神社

17時～　入浴　夕食（18時30分～）

懇親会

〈6日〉

7時30分～　朝食　チェックアウト

8時30分～　与喜山暖帯林の観察と相互学習

14時　解散（井谷屋）予定

会費　17，000円

（5日の講座のみ　1，000円）

定員　30名（締切10月30日・先着順）

申込　関西支部　斧田一陽

〒567-0862

大阪府茨木市美沢町11-B-1103

TEL・FAX：072-633-6556

090-4037-4542

（問い合わせも同じ）

備考　地図　2万5千分の1「初瀬（はせ）」

井谷屋には2か所の駐車場があります。

移動は徒歩を予定しています。

長谷寺の参拝希望者は受付前か解散後に各自でお願いします。（拝観料500円）

参考図書

・世界遺産春日山原始林

―照葉樹林とシカをめぐる生態と文化―

前迫ゆり編

ナカニシヤ出版　2500円+税

・シカの脅威と森の未来

―シカ柵による植生保全の有効性と限界―

前迫ゆり・高槻成紀編

文一総合出版　3000円+税

以上

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈七月度〉

① 出江俊夫氏が自然保護委員に就任。

② 理事会報告　7月13日（水）

・準会員制度、賛助会員規定の整備。

・財政が厳しい折、支部助成金一人二千三百円、新入会者報奨金は一人四千円のまま。

・総会で提案された会員名簿の件を協議。

③ 山岳団体自然環境連絡会　7月20日（水）

・シカの被害と対策のシンポジュウムの開催の決定。

・ＨＡＴ-Ｊから「山の日記念行事」の植樹祭の行事に各組織の自然保護委員会が動いてほしいとの要望があった。

④ 自然保護委員会報告　7月27日（水）

全国集会について

ア 時間が足りなさ過ぎた。

イ 支部報告は最低2時間半はほしい。グループディスカションの報告時間がなかったのは反省点。会場使用時間が原因だったが、今後の課題。

・ 自然観察会

10月22日（土）横浜市青葉区寺家ふるさと村。

・「木の目草の芽」124号について。

・ 来年度の全国集会開催地について。

〈八月度〉

①理事会休会のため報告なし

②自然保護委員会　8月24日（水）

・ 高尾599ミュージアムに自然保護活動のパネル展示。8月1日～9日。

・ ライチョウサミット「第17回ライチウ会議長野大会」10月15日～16日開催。

・ 自然保護委員会を上高地山研で開催10月15日～16日。

・ 公開講演会を計画　テーマはシカ被害と対策、11月に開催予定。講師は麻布大学いのちの博物館の高槻成紀上席学芸員に依頼予定。

・ 全国集会開催地継続交渉。

・ 「木の目草の芽」124号、9月28日発送予定。

・ 「木の目草の芽」125号について。

・ 神奈川支部自然保護委員長に小亀真知子さんが就任。

・ 「木の目草の芽」123号発行。

【購読料のお願い】

●本紙を購読されている方は、今年度（四月～三月）の年間購読料として、1千円を「郵便振替用紙」または「郵券」でお送り頂きたくお願いいたします。

（郵便振替用紙を同封いたします）

【カンパのお願い】

●購読者以外の方（理事、支部長、支部事務局長、自然保護協力委員、支部自然保護委員、贈呈者等）で送料等のカンパにご協力頂ける方は、「郵便振替」または「郵券」でお送り頂きたくお願いいたします。

●送り先

・郵便振替

００１８０－４－７１０６８８

加入者名　川口章子

・住所

〒２７４－００６３

船橋市習志野台４－４３－１－１０２

川口章子

〈編集後記〉全国集会の報告を2回にわたりまとめました。報告原稿にご協力くださったみなさまに、改めてお礼申し上げます。元川